ドクロ島からの脱出

noprops／原作
黒田研二／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

たけし
南部小学校の五年生。お調子者で臆病。
でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。
ひろし
北部小学校の五年生。小学生とは思えない、
洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。
美香
東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、
いつも一緒にいる。運動神経バツグン。
卓郎
東部小学校の五年生。頭の回転が早く、
決断力と行動力がある。頼れる存在。

怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見ると襲いかかってくる。
ひろしたちは、自分たちが住む街の外れにある洋館
「ジェイルハウス」と、今は廃校になっている
「碧奥小学校」、さらに「碧奥医院」でこの怪物に出会っているが、
どうやって生まれたのか、どこからやって来たのか、
すべてがなぞに包まれている。
どうやら犬は苦手らしい……？

ダケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、青鬼と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。泳ぐのが苦手。

バルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。イケメンと、動物などのカワイイものに目がない。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。

クロさん

ネイチャーガイド。卓郎と美香が通う東部小学校の課外授業で、ガイドをしていたことをきっかけに、ひろしたちと知り合う。

目次

1 夏休み最後の日 006
2 無人島の忘れ物 017
3 危険な男 029
4 突然の出来事 038
5 なぞの巨大生物 047
6 漂着 057
7 さあ、どうする？ 066
8 森の中で 075
9 赤のパズル 085
10 火を起こせ 096
11 灯台とろうそく岩 105

12 小さな悪魔 113
13 ふわっふわの怪物 120
14 ドクロ島にひそむもの 130
15 青のパズル 137
16 黄のパズル 145
17 クロさんのたくらみ 155
18 裏切り 164
19 こわれた吊り橋 176
20 海岸の攻防 193
21 ドクロ島からの脱出 207
ひろしによるなぞの解説 220

あらすじ

この夏、三度にわたって化け物におそわれた、ぼく――タケル。これまでは、お調子者のたけし君、博識なひろし君、しっかり者の卓郎君、運動神経バツグンの美香ちゃんたちといっしょに、知恵と勇気をふりしぼって「怪物」に立ち向かい、命からがら逃げきってきた。

夏休み最終日となる今日は、みんなで碧奥海岸にやってきていた。楽しい思い出づくり……といきたいところだけど、宿題に追われているたけし君の手伝いで、みんな大変そう。そんなとき、浜辺に積み上げられた波消しブロックの上に、女の子が立っていることに気づいて……。

1 夏休み最後の日

人間って本当に不思議な生き物だ。

怒ったり、泣いたり、笑ったり、いつだってめまぐるしく表情が変わる。

こんなにも感情表現が豊かな動物を、ぼくはほかに知らない。

さらに不思議なのは、同じ状況に出くわしたときでも、個体によってその反応が全然ちがうことだ。

たとえば、ぼくはお肉が大好きだ。いきなり目の前に分厚い生肉が現れたら、ちぎれんばかりにしっぽをふりまくって喜ぶだろう。それは散歩のときによく顔を合わせる柴犬のロック君もチワワのカレンちゃんも同じだった。

だけど、人間はちがう。

昨日、お父さんの退院おめでとうパーティーをたけし君ちのお店――〈食堂まんぷく〉で開いたんだけど、パイナップル入りの酢豚をたけし君はものすごくおいしそうに食べていたのに、卓郎君はしかめっ面で、美香ちゃんにいたってはほとんど泣きそうな顔で口に運んでいた。どうし

てみんなの表情がちがうのか不思議でならない。
今もそうだ。
「ねえ、ピンク色のかわいい貝がらを見つけちゃった！」
砂浜を元気にかけ回っていた美香ちゃんが右うでをつき上げる。さっきかじってみたが、粉々にくだけるだけで、貝がらなんてちっともおいしくない。それなのに、美香ちゃんはここへやって来てからずっとうれしそうだ。
「あーあ。なんでこんなことしなくちゃいけねえんだよ」
卓郎君は口をとがらせ、露骨に不満げな表情をうかべる。
「そんなこといわずにたのむよ。マジでヤバいんだからさ」
今にも泣き出しそうな顔をしているのはたけし君だ。たけし君は潮のかおりが染みついた木製のベンチにこしかけ、ひざの上に置いた算数のドリルを延々と解き続けていた。
「たけし。おまえ、今日がどれだけ大切な日かわかってるのか？」
「もちろん、わかってるさ。八月三十一日——夏休み最後の一日。たまりにたまった宿題を絶対に終わらせなくちゃいけない日だろ？」
「バカ野郎。それはおまえだけだ。夏休みの宿題なんて、俺も美香もとっくに終わらせちまった

よ」
卓郎君はぶっきらぼうな口調でさらに続けた。
「明日からまた学校が始まる。一日中、好きなことをやっていられるのは今日が最後なんだぞ。スケボーにラジコン、ボウリング……夏休みにやり残したことをまとめてやっちまうつもりだったのに、おまえのせいで台無しになっちまったじゃねえか」
「ホント、みんなにはすまないと思ってるってば。お礼に今度、父ちゃんの作った特製チャーハンをごちそうするからさ。卓郎、おいしいおいしいって食べてただろ？」
「……まあ、そういうことなら手伝うけどさ」
卓郎君は肩を上下に動かすと、海に向かって歩き出した。
「さっさと終わらせちまおうぜ。おい、ひろし。そっちはどんな感じだ？」
みんなから少しはなれたところ——波消しブロックのそばにしゃがみこんでいたひろし君に声をかける。
「……」
しかし、ひろし君は返事をしない。じっと一点を見つめたまま、人形みたいに動かないでいる。

「おい、ひろしってば！」
卓郎君はさらに声を張りあげた。ぼくも加勢して、ワンとほえる。
「え……はい？　どうしました？」

ようやく気がついたのか、ひろし君がこちらに顔を向けた。せっけんみたいな白いはだは、陽に焼けてずいぶんと赤くなっている。
「おまえ、そんなところでなにやってるんだよ？」
「フナムシがいます。これほどたくさんのフナムシがひしめき合っている姿を、僕は今まで見たことがありません」
「イヤだ」
美香ちゃんがまゆをひそめた。
「フナムシってゴキブリみたいなヤツでしょ？　気持ち悪い」
「いいえ。ゴキブリは昆虫綱ゴキブリ目の生物です。フナムシは甲殻綱等脚目フナムシ科なので、ダンゴムシの仲間と考えるべき――」
「ああ、わかった、わかった。フナムシの話はそのへんでいいや」
卓郎君はひろし君の言葉をあっさり受け流した。ふたりが知り合ってからまだ二週間ほどしか経っていないのに、すっかりひろし君のあつかいに慣れてしまったようだ。
「ひろし。フナムシなんてどうでもいいから、早くめずらしい貝がらを集めてくれよ」
算数ドリルをにらみつけたまま、たけし君が情けない声を出す。

「最低でも十個は集めないといけないんだからさ」
「貝がならすでに三十個ほど見つけましたよ」
「ホントか？　さすがだな、秀才」
たけし君の表情がぱっとかがやく。
「どれもかなりめずらしいものです。きっとみんなおどろくはずですよ」
「マジで？　うれしいなあ。ちょっと見せてくれよ」
たけし君はベンチから立ち上がると、砂をけりあげながら、ひろし君のいるほうへと走った。
海風がふき、砂の上に落ちた算数ドリルのページをめくっていく。さらに強い風がふいたら、海まで飛ばされてしまいそうだ。
まったく……しょうがないなあ。
ぼくは算数ドリルを口にくわえると、ベンチの上に飛びのった。パラソルが太陽の光をさえぎってくれるので、すずしくて気持ちいい。
この場所は昼寝に最適だ。ぼくは算数ドリルをしき布団の代わりにしてからだを丸めた。
ぼくの家から自転車で三十分ほど走った場所にある碧奥海岸。
夏休みの宿題を手伝ってほしいとたけし君に泣きつかれ、ぼくたち四人と一匹はここまでやっ

て来た。
たけし君は今日になるまで、宿題にまったく手をつけていなかったらしい。丸一日、集中して机に向かえば、なんとかなると思っていたようなのだが、今朝、約一ヵ月半ぶりにランドセルを開き、夏休み前に担任の先生からもらったプリントに目を通して初めて、めずらしい形の貝がらを集めて標本にするという理科の宿題があったことに気づいたのだそうだ。
お父さんの退院おめでとうパーティーでおいしい食べ物をたくさんごちそうしてもらったばかりということもあり、たけし君に泣きつかれたみんなは断ることができなかったらしい。
心地よい潮風にふかれ、うつらうつらしていると、
「おい。なんだよ、これ？」
遠くからたけし君のさけび声が聞こえ、ぼくは目を覚ました。
「オレはめずらしい貝がらを集めてくれってたのんだんだぞ」
「はい。ですから、このとおり」
「全部、アサリじゃないか。こんなもの、うちの台所でも見つけられるぞ」
「よく見てください。この貝がら、丸い小さな穴が空いているでしょう？　おそらく、ツメタガイにおそわれたあとですね」

「……ツメタガイ？」
「タマガイ科の巻貝です。ツメタガイはアサリの表面に穴を開け、そこから侵入して中身を食べつくしてしまいます」
「へえ……そうなんだ。貝を食べちまう貝もいるんだな」
たけし君は感心したようにうなずいたあと、
「いや、ちがう。そうじゃないんだよ」
その場で地団太をふんだ。
「確かにめずらしいかもしれないけど、オレが集めたい貝がらはそういうヤツじゃなくてさ。もっとこう形や模様が派手で――」
「不思議だとは思いませんか？」
「はあ？　なにが？」
「どれも同じアサリなのに、白かったり黒かったり青みがかっていたり……ああ、こちらのアサリはピンクですね。模様も様々。ひとつとして同じものはありません。なぜなのでしょう？」
「知るか、そんなこと！」
「いえ、僕はべつにたけし君に解答を求めたわけではありませんので」

「ああ。どうせオレはなんにも知らないバカ野郎だよ」

ふたりの会話はまるで漫才みたいだ。聞いていてあきない。

潮風にのって、ラベンダーのかおりがただよってきた。ラベンダーは春の花だ。夏の終わりの海岸にさいているはずはない。

どこからただよってくるのだろう？

ぼくは顔を上げて、風のふいてくる方向に視線を向けた。

波消しブロックの上に人が立っている。小学一、二年生くらいの幼い女の子だ。

女の子は大きな麦わらぼうしをかぶり、ひまわりがらのワンピースを身につけていた。

風が強くて麦わらぼうしがふき飛ばされそうになっているのか、女の子は左手でぼうしをおさえ、じっと海のほうをながめている。

女の子の視線の先を追いかけると、沖に小型のボートが見えた。女の子はそちらに向かってゆっくりと歩き出す。足もとが不安定なので、ときどきバランスを大きくくずした。けがでもするんじゃないかと、見ているだけでハラハラしてしまう。

数メートル先は海だ。波が波消しブロックにぶつかり、白い花をさかせた。

ねえ、危ないよ。

ぼくは女の子に声をかけた。そのまま歩き続けたら、海に落ちてしまいそうだ。

ぼくが波消しブロックに向かってやかましくほえているのを見て、みんなも女の子の存在に気づいたらしい。

「あんなところにだれかいる」

卓郎君が彼女を指差した。

「危ねえなあ。そのうちすべって転ぶ――」

「きゃっ！」

卓郎君の予言どおり、女の子は派手にしりもちをついた。

怪我でもしていたら大変だ。ぼくはベンチから飛び降りると、全速力で彼女のもとへ向かった。

波消しブロックはところどころコケが生えていて、確かに滑りやすい。ぼくはコケの生えていないところを選んで軽やかにジャンプを続け、女の子のそばへとかけ寄った。

「……いったぁい」

女の子はこしのあたりをさすりながら、ゆっくりと立ち上がった。苦痛の表情をうかべてはいるが、ぱっと見た感じけがはなさそうだ。

周りにみんなが集まってくる。

「……サクラダさん？」

ひろし君が口を開いた。

「もしかしてサクラダさんではないですか？」

こしをさする女の子のほうをじっと見つめながら、淡々とした口調でたずねる。

「……ひろし君？」

女の子のくちびるがかすかに動いた。

2 無人島の忘れ物

卓郎君と美香ちゃんが波消しブロックの上を走って、こちらにやって来る。

コケに何度も足をとられながらも、ふたりは絶対に転ばなかった。さすがの運動神経だ。

「おい、大丈夫か？」

卓郎君と美香ちゃんが両側から女の子の肩を支える。非力なぼくは三人の足もとをぐるぐると走り回って、ただがんばれと応援するしかない。三人は慎重に歩きながら、ようやくコケ地獄を脱出した。

砂浜に座ってひと息つく。

女の子は桜田ナオと名乗った。六、七歳くらいの幼い感じに見えたが、おどろいたことにみんなと同じ小学五年生。しかも、ひろし君と同じ学校、同じクラスだという。

「びっくりした……ひろし君、こんなところでなにをしているの？」

肩からぶら下げていたピンクの水筒を手に取り、ナオちゃんはいった。水筒の中身をゆっくりと飲み、ほっとしたような吐息をこぼす。でも、視線は落ち着かなかった。知らない子供たちに

かこまれて、少し緊張しているようにも見える。
「桜田さんはどうしてここに？」
「ナオの名前、覚えてくれてたんだ」
ナオちゃんはかわいらしいえくぼを作り、うれしそうに笑った。長いまつげが風にゆれる。お父さんが仕事場にかざっているフランス人形に似た、キレイな顔立ちをしていた。
「いつもむずかしい本ばかり読んでて、クラスメイトのことなんて全然興味ないのかと思ってた」
「アサリと同じで、人間は個体の判別がしやすいですからね。クラスメイトの顔と名前を覚えるくらい簡単です」
ひろし君はメガネのフレームを右手の中指一本で持ち上げると、なんら悪びれる様子もなく、そういいのけた。
ナオちゃんがぽかんとした顔つきでひろし君を見つめる。どうやら、同じ教室で勉強している仲でありながら、ひろし君の性格についてはあまりよく知らないようだ。
「ねえねえ、ナオちゃん。あんなところで一体、なにをしていたのさ？」
たけし君がもじもじとからだをよじり、はにかみながらたずねる。いつもと様子がちがってい

て、なんだか気持ち悪い。
「あのまま海に飛びこむんじゃないかと思ってびっくりしちゃったよ」
「そのつもりだったんだけど……」
うつむいたまま、ナオちゃんはぼそりと答えた。
「え？」
ひろし君以外の三人が顔を見合わせる。ひろし君は早くもナオちゃんの話にあきてしまったのか、集めた貝がらの観察を始めていた。
「どうして？　なにかつらいことでもあったの？」
たけし君が顔を近づける。
「もしかして、明日から学校が始まることが原因？　だれかにいじめられているとか？」
「ううん、そうじゃなくて……」
「あ、わかった。夏休みの宿題が終わってないんだろ？　だったら心配するな。オレも同じだから。みんなも手伝ってくれるしさ。いっしょにがんばろうよ」
「学校は大好きだし、宿題も終わったから大丈夫。そうじゃないの……ナオ、あの島にどうしても行かなくちゃいけなくて……」

そう口にしながら、ナオちゃんは海のほうを指差した。
「あの島？」
みんながいっせいに、ナオちゃんの示した方向に目をやる。ひろし君も顔を上げて海を見た。
「ああ……青島ですね」
海岸線にぽつりとうかぶ島に視線を向けてひろし君はつぶやいた。
「青島？　おまえ、あんなちっぽけな島の名前まで知ってるのか？　すげえな」
卓郎君が感心したようにいう。
「いえ。二週間前、学校の課外授業で出かけた島なので、たまたま覚えていただけです」
そういえば、船で一泊二日の旅に出かけたと、ちょっと前にひろし君が話していたような気がする。
「大きなダンゴムシや、奇妙な形をしたミミズなど、めずらしい虫がたくさんいたので、いつかまた行ってみたいなと思っていましたが、もしかして桜田さんも？」
「ううん、そうじゃなくて」
ひろし君が口にした、気味の悪い生物の姿を想像してしまったのか、ナオちゃんは自分のうでをさすりながら、ぶるんぶるんと激しく首を横にふった。

「ナオ……課外授業のとき、あの島に忘れ物をしちゃって……」
今にも消え入りそうな声で答える。
みんなから少しはなれたところに座り、ぼくはナオちゃんを観察した。
たけし君よりもさらに背が低く、顔立ちも幼くて、まるでひとりだけ低学年の子供が混ざっているように見える。
ナオちゃんの着ているひまわりがらのワンピースは、ときどき風にふかれて大きくゆれ、まるでおどっているみたいだ。
「……忘れ物ってなにを？」
「お人形さん。キナコちゃんっていう名前の……ナオの大切なお友達なんだけど」
ひろし君の問いかけに、ナオちゃんはたどたどしく答えた。
「二週間前の課外授業のときに、その人形を忘れてきてしまったわけですか？」
小さなくちびるをとがらせて、ナオちゃんがうなずく。
「新しいお人形を買ってあげるから、キナコちゃんのことはもう忘れなさいってママにいわれて、ナオもそうしようと思ったんだけど、やっぱりキナコちゃんのことが忘れられなくて。ひとりぼっちになってさみしいよお、さみしいよおって泣いてるんじゃないか、もしかしたらネズミ

かなにかにかじられちゃってるんじゃないか、毎日心配で心配で……夜もねむれなくなっちゃって……」

「そりゃあ大変だ。かわいそうに」

たけし君はうでを組み、うんうんとうなずいた。

人形には感情などありません。科学的に考えて、人形がさみしがったりすることなどないと思いますが。

ひろし君なら絶対にそう答えると思ったのだが、彼はなにもしゃべらず、ナオちゃんの顔を正面からじっと見つめたまま、気難しい表情をうかべている。

「おまえ、まさか、その人形を取りもどすために、あの島まで泳いでいこうと思ったのか？」

卓郎君がたずねた。

「うん……ナオ、水泳はわりと得意だから」

ナオちゃんはあっけらかんとした態度で答えた。

「いくら水泳が得意だからって……あの島までどれだけの距離があると思ってるんだ？」

「課外授業のとき、ハルナ先生が説明してくれました。ここから青島までの距離は約五キロ。学校のプール二百往復分とほぼ同じ距離です」

「二百往復……」
具体的な距離を知って気が遠くなったのか、たけし君がおでこに手を当てながらふらふらとよろめく。
「実際には波や潮の流れなどが邪魔をしますから、プールで泳ぐよりもさらに大変だと思います。泳いで島にわたるのはやめておいたほうがよいかと――」
「当たり前だ」
ひろし君の言葉をさえぎって、卓郎君は大声をあげた。
「島に行きたいなら、船を使えばいいじゃねえか」
「ああ、それは難しいですね。青島は無人島なので、定期便のようなものはいっさいありません。船に乗るのであれば、自分たちで手配しないと」
「みんなでいかだでも作る？」
「バカか、おまえ。いかだを作るには丸太が何本も必要なんだぞ。どこにそんなものがあるんだよ？」
たけし君の提案を、卓郎君は即行で却下した。
「たとえいかだを作ることができたとしても、このあたりは潮の流れが速いので、見当ちがいの

方向に流されて遭難することは目に見えています」
「じゃあ、どうすればいいんだよ？」
たけし君がいらだたしそうに砂をふみつける。
「ぼくたちだけの力では無理ですね。大人にたのんでエンジンのついたボートを操縦してもらわないと」
「卓郎。確か、おまえのお父さんって釣りが趣味なんじゃなかったっけ？　おまえんちってお金持ちだし、ボートくらい持ってるんじゃないのか？」
「俺の親父は渓流釣りしかやらねえからな。ボートなんて持ってねえよ。もし持ってたとしても、いきなり貸してくれるわけねえだろ」
卓郎君はため息をついた。
「そもそも、おまえは他人の心配なんてしている場合じゃねえだろ？　夏休みの宿題はどうなったんだ？」
「それはまあそうなんだけどさ……でも、困ってる女の子が目の前にいるのに放っておけないだろ？」
たけし君も負けじといい返す。そんなふたりのやりとりを、美香ちゃんはあきれた様子で見つ

めていた。
「あの……ごめんね、ナオのせいで。もういいよ。ナオ、自分でなんとかするから」
とまどった様子のナオちゃんが、卓郎君とたけし君の会話に口をはさむ。
「大丈夫。オレがなんとかしてやるから」
たけし君はそういって、自分の胸を強くたたいた。
「ありがとう……やさしいんだね」
「やさしいなんて……そんな……」
ナオちゃんの言葉に、でれっと鼻の下をのばす。そんなたけし君を、卓郎君は不機嫌そうにらみつけた。先ほどからひとこともしゃべろうとしない美香ちゃんは、困ったような視線をナオちゃんに向ける。
またこれだ。にやけたり、おこったり、困ったり。同じ状況に立たされているはずなのに、みんなの感情は全然ちがっていた。
ただ、ひろし君だけはいつもと変わらない、なにを考えているのかよくわからない表情を張りつけている。
車のエンジン音に似た音が耳に届いた。音のするほうに顔を向ける。

水平線に船が見えた。小型のボートだ。水しぶきをあげながら、ボートはまっすぐこちらに近づいてくる。

ぼくより少しおくれて、みんなもボートの存在に気づいたらしい。

「おお、カッコいい！」

たけし君が歓声をあげた。

「あの船に乗ってる人が知り合いだったら、たのみこんで島まで連れてってもらうのになあ」

「……あれ？」

美香ちゃんが声をもらす。

「ねえ、あのボートに乗ってる人、あたしたちに手をふってるんじゃない？」

「え？　マジで？」

美香ちゃんのいうとおりだった。白いシャツを着た長身の男性がこちらに向かって右手をふりながら、なにやらさけんでいる。

「おーい、みんな！」

その声には聞き覚えがあった。

「こんなところでなにをやっているんだい？」

「クロさんだ！」

たけし君がはずんだ声を出す。それまでうかない顔つきだった卓郎君と美香ちゃんの表情も一変した。

「クロさーん！　お願いがあるんだけどーっ！」

「クロさん、こっちこっちーっ！」

たけし君、卓郎君、美香ちゃんの三人が口々にさけぶ。

「ナオちゃん、よろこんで。クロさんにたのめば、島にわたれるかもしれないよ」
「え？　え？　あの人、みんなの知り合いなの？」
ナオちゃんのほおがゆるんだ。ひろし君はいつもどおりのポーカーフェイスでボートをながめていたが、どことなくうれしそうにも見える。
ただひとり――いや一匹――ぼくだけは牙をむき、低くうなって、敵意をあらわにした。
「おいおい、どうしたんだよ？」
たけし君がぼくの頭をぽんぽんとたたく。
「忘れちゃったのか？　クロさんだぞ」
もちろん、忘れるわけがない。
みんなはなにもわかっちゃいないのだ。
クロさんのあのさわやかな笑顔はうそっぱちだ。
みんなはまだあいつのおそろしさに気づいていない。

3 危険な男

クロさんのボートを追いかけて、ぼくたちは桟橋までやって来た。
あいつは危険だ。かかわらないほうがいいよ。
何度もそう忠告したのだけれど、残念ながらぼくの言葉は人間には伝わらない。しつこくほえたり、ズボンのすそを引っ張ったりもしたが、みんなは困った顔をするだけだ。
「邪魔すんなよ、タケル」
「どうしたんだ？　おまえ、さっきからなんだかおかしいぞ」
「クロさんに会いたくないなら、タケルはここで待ってる？」
ひとり待ちぼうけなんてとんでもない。ぼくは仕方なく、みんなのあとを追いかけたのだった。
「おどろいた。まさか、こんなところでみんなと顔を合わせるなんてさ」
ボートが流されてしまわないよう、杭にロープを結びながらクロさんはいった。
「僕たちもびっくりしました。クロさんはここでなにをしていたんですか？」
卓郎君が大人向けのよいこモードでたずねる。

「仕事だよ。ここは水がキレイで、海の上からでも魚がよく見えるからね。さっきまで都会からやって来たお客さんを乗せて、このあたりをボートで走っていたんだ」

クロさんは山や川、海など自然があふれる場所で、みんなが楽しく安全に遊べるように案内をしてくれるネイチャーガイドだ。

ぼくたちはひょんなことからこの人と知り合ったが、実はおそろしい裏の顔を持っていることをぼくだけが知っている。クロさんはぼくたちのことをうらんでいて、ひそかに復讐の機会をうかがっているのだった。

「いやあ、こんなところで出会うなんて、ホント奇遇だね」

クロさんは笑いながらいったが、白々しいにもほどがある。そんな偶然、簡単に起こるはずがない。クロさんはぼくたちが今日海辺にいることをなんらかの方法で調べて、ここへやって来たのだ。きっと、またなにかよからぬことをたくらんでいるにちがいなかった。早々に退散するべきだろう。ぼくはひろし君のズボンのすそをくわえると、力いっぱい引っ張った。

「タケル君、どうかしましたか？」

なんとかしてぼくの思いをひろし君に伝えようと、今度はクロさんに向かって激しくほえる。

「……タケル君？」

ぼくの異変に、ひろし君はまゆをひそめた。カンのいいひろし君なら、きっとぼくの言葉に耳をかたむけてくれるはずだ。ぼくは必死でほえ続けた。

だけど、クロさんのほうが一枚上手だった。

「さっきまでいっしょにいたお客さんが猫を連れていたからね。たぶん、僕にもにおいが移ったんだろう。それで興奮しているのかな？」

クロさんはしれっとそんなうそをついた。クロさんのからだからは猫のにおいなんてこれっぽっちもしない。

「ああ、そうなんですか」

ひろし君はクロさんの言葉をあっさり信じたらしい。それ以上、なにもいおうとはしなかった。クロさんにかみついてやろうかとも考えたが、

「こら、タケル。おとなしくしなくちゃダメだよ」

美香ちゃんに抱きかかえられてしまい、それもできなくなってしまった。

「ねえ、クロさん。オレたちをあの島まで連れてってくれないかな？」

いきなり、たけし君がとんでもないことをいい出した。

ダメ、ぜったいにダメだよ！　そいつになにをされるかわかったもんじゃない。

ぼくはじたばたと手足を動かし、たけし君にそうさけんだが、まるで伝わった様子はない。
クロさんにナオちゃんを紹介しながら、たけし君は島にわたりたい理由をざっと説明した。
「なるほど……事情は大体わかった」
話を聞き終えると、クロさんはナオちゃんのほうへ顔を向けた。
「君の大切にしている人形がどこにあるか、見当はついているのかな？」
「あ……えーと……」
大人を前にすると人見知りになってしまうのか、ナオちゃんははずかしそうにうつむいた。
「みんなでバンガローにとまったの……たぶん、そこに……」
ぼそぼそと小さな声で答える。
「バンガローの場所なら大体わかるよ。よし、そういうことなら今から人形を取りに行こう」
「……え？　いいんですか？」
ナオちゃんが顔を上げた。
「このボートを使えば、十分ほどで島までたどり着ける。小さな島だから、バンガローまでの道のりもあっという間だし。一時間以内にはここまでもどってこられるんじゃないかな？」
「さすがクロさん！　たよりになるうっ！」

たけし君は跳びはねて喜び、口笛をふいた。
「おまえ、宿題はいいのかよ？」
卓郎君が横やりを入れる。
いいぞ、卓郎君。その調子でたけし君を説得してよ。
「一時間で帰ってこられるんだろ？　それなら問題ないじゃん。あっちの島に行ったら、もっとめずらしい貝がらが見つかるかもしれないし」
「人形探しはクロさんに任せればいいじゃねえか。俺はほかにもいろいろとやりたいことがあるんだよ。おまえが島へ遊びに行くっていうなら、俺はもう帰るぞ」
卓郎君は強い口調でそういった。
みんなも卓郎君に従って家にもどったほうがいい。ぼくはしっぽをふりながらひと鳴きした。これ以上、クロさんにかかわっちゃいけない。
「卓郎君。ボートの操縦には興味あるかな？」
クロさんが口をはさんだ。同時に、卓郎君の肩がぴくりと動く。
「ホントは免許を持ってないと操縦できないんだけど、ちょっとだけなら動かしてみてもいいよ」
「クロさん、ホントに？」

さっきまでとちがい、卓郎君の声ははずんでいた。
「俺――いや、僕、一度、こういう船を操縦してみたかったんです。そうと決まったらすぐに行きましょう。たけし、なにぐずぐずしてるんだよ。さあ、早く」
「え？　あ、ああ……」
卓郎君の変わり身の早さに、たけし君は一瞬とまどった表情を見せたが、
「よし、無人島へ出発だ！」
こぶしを天高くつき上げて、大声を張りあげた。
「君たちも行くだろう？」
クロさんが美香ちゃんに顔を寄せながらきく。
「あ……はい……卓郎が行くのなら……」
美香ちゃんはほおを赤らめながら答えた。ふだんは気の強い美香ちゃんだけど、実はイケメンにせまられると、か弱い女の子になってしまうことに、ぼくはつい最近気がついた。
「ひろし君は？」
「……そうですね」
ひろし君はあごに手を当て、考えるそぶりを見せた。もはや、たよりになるのはひろし君だけ

だ。
お願い。みんなに行っちゃダメだって警告して。
いのるような気持ちで、ひろし君を見上げる。
「今日は午後から、町の図書館に『昆虫大図鑑』を借りに行こうかと――」
そうだ。クロさんのボートに乗りこむなんてもってのほか。今から図書館に向かって――
「借りに行こうかと思っていたのですが、それどころではありませんね」
無表情は相変わらずだが、どことなく声がはずんでいる。
「青島にはめずらしい虫がたくさんいました。いつかまた行ってみたいと思っていたので、これは願ってもない機会です。ぜひ、連れて行ってください」
全身から力が抜け落ちた。どうやら、ぼくのいのりは神様まで届かなかったみたいだ。
「よし、決まりだな。じゃあ、すぐに出発しよう」
クロさんは白い歯を見せ、さわやかな笑みをうかべた。
そんな顔をしたってだまされるものか。
思いきりクロさんをにらみつける。
ぼくの視線に気づいたのか、クロさんがこちらを見た。

「モフモフのわんこ君。君はどうする？」
もちろん、ついていくに決まっている。クロさんの正体に気づいているのはぼくだけだ。ぼくがみんなをクロさんの魔の手から守ってやらなければ。
ぼくはあさっての方向を向くと、クロさんの横を通り抜けて、そのままボートに飛び移った。潮のかおりがしみこんだシートの上に寝そべり、ふんと鼻を鳴らす。
「なんだ。タケルのやつ、行く気満々じゃないか」
たけし君がぼくを指差して笑う。自分が危険にさらされているとも知らず、のんきなものだ。
「さあ、みんなも乗って」
桟橋の杭につないだロープをほどきながらクロさんがいう。
はしゃぎ声をあげながら最初に乗りこんできたのはたけし君だった。操縦席の計器類をべたべたとさわり、ひとりはしゃいでいる。
たけし君のあとには、卓郎君と美香ちゃんが続いた。卓郎君はさりげなく手をのばし、美香ちゃんがボートに乗りやすいようにサポートする。たぶん、このあたりが女の子にもてるかもてないかのちがいなのだろう。
みんなが船に乗りこむ間も、ぼくはクロさんの行動をチェックし続けた。

少しでも妙な行動に出たら、速攻でのどぼとけにかみついてやる。
そう思っていたが、クロさんは終始笑顔をはりつけていて、そう簡単にはボロを出しそうになかった。

4 突然の出来事

ひろし君、たけし君、卓郎君、美香ちゃん、そしてぼく。
いつもの五人組――正確には四人と一匹だけど――に、ひろし君と同じクラスのナオちゃんをプラスした六人は、クロさんの操縦するボートで無人島へと向かった。
潮風が気持ちいい。ときどきはね上がるしぶきは、青空に白いペンキで落書きをしたみたいに見えてなんだか面白かった。
……いや、うかれている場合ではない。
クロさんの魔の手からみんなを守るという使命が、ぼくにはあるのだ。どんなときでも気を張っていなければ。
ぼくは口を漢字の〈一〉の形に結び、背すじをぴんとのばした。
「ときどきゆれるから気をつけて。あまり身を乗り出さないようにね。落とされても知らないぞ」
車のハンドルに似た操舵輪を動かしながら、クロさんがいう。

まさか、このボートからぼくたちをつき落とすつもりなのでは？　ぼくはクロさんをにらみつけた。

クロさんの日焼けしたはだとがっちりした肉体は、夏の海によく似合っている。もしこの場所にひろし君の担任のハルナ先生がいたら、目をハートの形に変えてうっとりとした表情をうかべたにちがいない。

潮風にふかれ、クロさんの短い髪がゆれた。それだけでカッコよく見えるのだから、なんともにくらしい。……ぼくの毛もあんなふうに風にゆれたらカッコよく見えるのかな？　ぼくだって男の子だ。かわいいといわれるよりはカッコいいといわれたほうがうれしい。

「今から向かう島が、このあたりの漁師さんたちになんと呼ばれているか知っているかい？」

「青島ですよね？」

クロさんの質問に、ひろし君はすぐさま答えた。

「確かに地図にはそう記されているけど……地元の人たちには別の名前で呼ばれることが多いんだ」

「別の名前？」

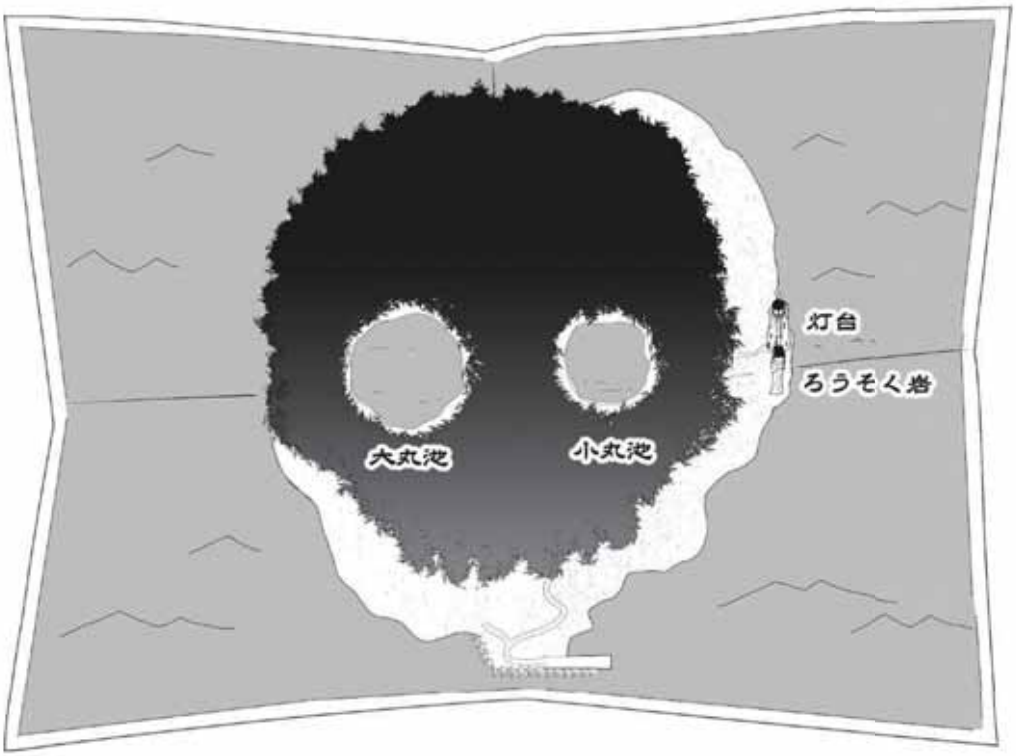
「ドクロ島」

みんなの表情が一瞬固まった。
「……ドクロ？」
たけし君のまゆ毛が毛虫みたいにぴくんと動く。
「ドクロってガイコツのことだろ？　どうしてそんな名前で呼ばれてるわけ？」
「もしかして、島のあちこちにガイコツが転がっているとか……」
卓郎君がにやにやと笑いながら答えた。
「バ、バカ！　やめろよ！　そんな話したら、こわくなってくるじゃないか」
「島には化け物がいて、近づいた人間をみんな食っちまうんだ」
「化け物って……まさかあの青いヤツが？」
ぼくたちは過去に三度、青いはだを持つ巨人におそわれて大変な目にあった。青い虫を食べるとその怪物になってしまうらしい、ということだけは最近ようやくわかったけれど、それ以外のことは今もなぞにつつまれたままだ。ただ、ぼくたちが何度もあの怪物におそわれる原因がクロさんにあることはまちがいなかった。
――僕は絶対に、君たちを許さないよ。
前回、命からがら病院を脱出したあとで、クロさんがぼそりと口にした言葉を思い出す。

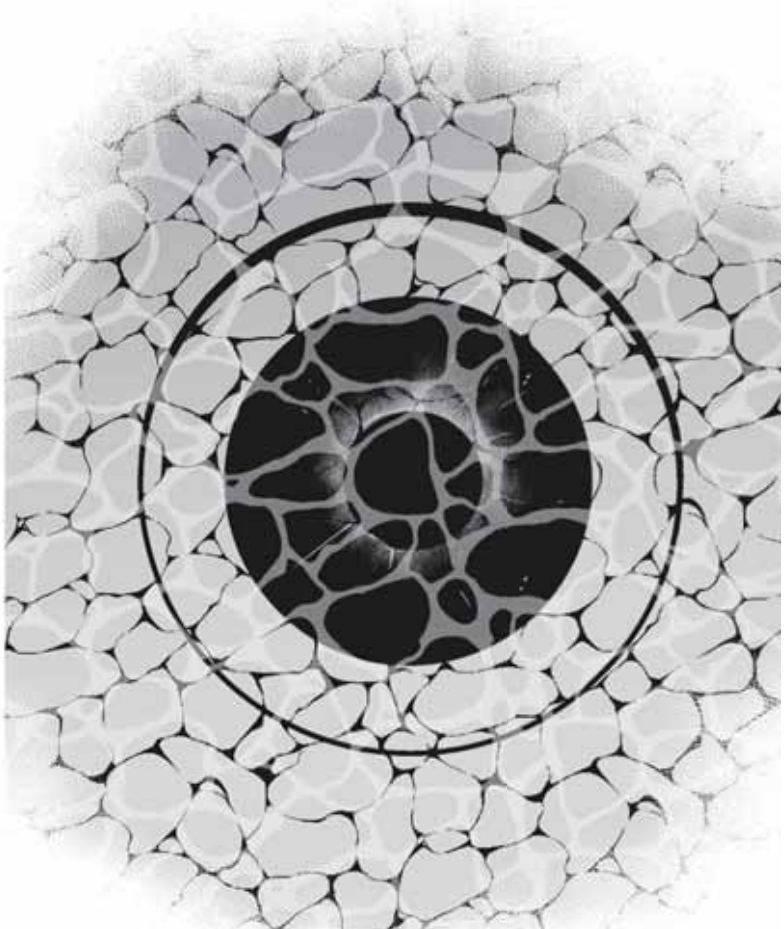
もしかして今回も……。
心の中で急速にふくらもうとしていた不安を、ぼくはあわてておさえこんだ。
「オレたちが集まったときって、必ずあの化け物が現れるだろ？　もしかして今回も……」
さっきまでの元気はどこへやら、たけし君は頭を抱え、ぶるぶるとふるえ始めた。
「心配するなって」
卓郎君がたけし君の背中をたたく。
「これまでに三回、俺たちはあの化け物におそわれたけど、いつだって無事に逃げ出せてるだろ？　あんなヤツ、二度と現れないにこしたことはないけど、もしおそってきたって今回も絶対に逃げきれる。こっちにはタケルもいるんだしさ」
卓郎君のいうとおりだ。なにも心配することはない。怪物は犬が苦手だ。ぼくがいればなんとかなるだろう。
「そうだな。オレたちには強い味方がついてるもんな」
あっという間に元気を取りもどしたたけし君がぼくのほうを見る。たよりにされるのは気分がよかった。
「もしあいつがまた現れたら、二度と俺たちをおそおうなんて考えないように、ぼこぼこにやっ

つけちまおうぜ」
「あはは。みんな、たのもしいな」
クロさんが笑った。みんなもつられて笑みをうかべる。だけど、ぼくだけは気づいていた。クロさんの目の奥はちっとも笑っていなかったことに。
「じゃあ、もしまたあの怪物が現れたら、みんなで力を合わせてやっつけちゃってくれ」
「ラジャー！」
敬礼のポーズをとりながら、たけし君は元気よくさけんだ。
「だけど、あの島がドクロ島と呼ばれるゆえんは、怪物が現れるからではないよ」
「え？　ちがうの？」
たけし君が目をぱちくりと動かす。
「美香ちゃん。足もとに置いてあるケースを開けてもらえるかな？」
「あ……はい」
美香ちゃんが座っているシートの下には、白いプラスチックケースが置いてあった。
まさか爆弾がしかけてあって、ふたを開いたとたんに爆発するとか？
……いや、それはさすがに考えすぎだろう。もしここで爆発が起こったら、ぼくたちだけでな

く、クロさんも海に放り出されてしまう。
実際、美香ちゃんがふたを持ち上げても、なにも起こらなかった。ケースの中にはバインダーやノート、筆記用具などが几帳面に整頓されて入っている。
「バインダーに青島の地図がはさんであるから、それを広げてみて」
クロさんの指示に従い、美香ちゃんは四つに折りたたんであった紙をひざの上で広げた。
「……本当だ。これはまさしくドクロ島ですね」
青島の地図をのぞきこみ、ひろし君はいった。
ひろし君の肩によじのぼって、ぼくも地図を見下ろす。なるほど。青島はガイコツの頭部に



よく似ていた。
「青島は円に近い形をしていて、島の中央には小丸池、大丸池と呼ばれるふたつの池がある。上空から見るとドクロの形に見えることから、ドクロ島と呼ばれているんだ」
東側にある小さいほうの池が小丸池、西側の大きい池が大丸池なのだろう。大きさのちがう目は、青い怪物にそっくりで、あまりいい気分はしない。
「南側の少し角張ったところに船着き場がある。ほら、もう見えてきたよ」
そういってクロさんは前方を指差した。古びた桟橋が見える。その向こうには鬱蒼とした森林が広がっていた。上空には黒い鳥――カラスだろうか？――が飛び回っていて、どことなく不気味な印象をあたえる。
「あんたが忘れ物をしたっていうバンガローはどこにあるんだ？」
ボートに乗ってから、ひとこともしゃべっていないナオちゃんに卓郎君がたずねた。
「あ……えっと……」
急に話をふられておどろいたのか、ナオちゃんが口ごもる。
「島の北側です。このあたりになるでしょうか？　ふたつの池の間を歩いていけば、すぐに見えてきます」

地図の一点を指差し、ナオちゃんではなく、ひろし君が答えた。
「島の大きさは東西、南北ともに約一キロ。はしからはしまで歩いても十分ほどしかかからないから、すぐにたどり着け――」
クロさんが補足説明をしているとちゅうで、船全体が大きくゆれた。みんなバランスをくずして、その場にたおれこむ。
「……え？」
クロさんがなにかよからぬことを始めたのかと思ったが、彼の顔は真っ青だった。必死で操舵輪をにぎっているがコントロールがきかないらしい。演技とは思えなかった。
「みんな、どこかにつかまって！」
クロさんが大声でさけぶ。ボートの前方が大きく持ち上がった。放り出されぬようデッキのロープにかみつく。だが、ボートはますますなめにかたむいた。
「一体、なにがあったんです？」
ボートのへりにしがみつきながら、卓郎君がたずねる。
「わからない。なにか大きなものがボートにぶつかったみたいだ」
「大きなものって……魚？」

「いやあああああっ！」
美香ちゃんのけたたましいさけび声があたりにひびきわたった。
「どうした？　美香」
「あれ……あれ……」
卓郎君のからだにしがみついていた美香ちゃんが海面を指差す。
青くすきとおった海水の下に、黒くて丸いものが見えた。
……魚？
いや、ちがう。
それは巨大な目玉だった。
ぼくたちの乗っているボートと同じくらいの大きさの目玉が、まばたきひとつせずに、じっとこちらを見上げていた。